



Echo No. 148  
平成30年 春彼岸

院寺寺  
峰福林禅  
一禅禅宗  
\* \* \* \*  
羽村臨濟会

# 神と仏と

現代日本人の七割は「無宗教」という調査結果があります。一八九九念に新渡戸稲造が世界的ベストセラーとなった『武士道』を英語で書いた動機も、日本では学校で宗教教育が無いのにどうやって道徳教育をしているのかと驚かれたことからとありますから、実はその当時から認識は今と変わらなかったようです。しかし日本には初詣という習慣があり、日本中の寺や神社全体で九千万人以上の参拝客があるそうです。イスラム教最大の行事、メッカの大巡礼に集まる人が二

百万人といえますから、実は日本の初詣が世界一の宗教行事なのです。日本人は神と仏の両方を大事にしてきた民族で、決して無宗教では無いのです。六〇二年に日本で初めて制定された憲法は、聖徳太子による十七条憲法でした。その第二条には、「篤く三宝を敬え、三宝とは仏法僧なり」とあります。これからの日本を仏教によって導こうとしたのです。こうして、以後の日本は仏教によって整えられていくのです。

奈良時代、聖武天皇は東大寺大仏殿を建立し、中国から鑑真和尚を招いて自ら戒を受け仏教徒として範を示されました。さらに全国に国分寺を建てて仏教を伝えました。

平安時代には、桓武天皇が都を奈良から京へ遷す際に、比叡山を国家鎮護の道場とする為自身の年号の延暦を冠したお寺を建立し、京都の街は一条から九条に区画して、僧侶が着ける袈裟の形にすることで京の都そのものを仏としたのです。鎌倉幕府は中国から建長寺開山の蘭溪道隆禅師を始め多くの禅僧を招き、禅を日本に広めました。この禅が武士の心の拠り所、武士道となり、やがて平和な江戸時代にはその精神が歌舞伎や浄瑠璃などによって庶民にまで行き渡ったのです。武士道には日本神道からも足りない部分

が補われたと新渡戸は記してします。

今後は無宗教などと言わずに、神と仏を信仰していきすと、堂々と宣言して欲しいと思います。

(禅林 恭山)

## 白隠禪師坐禪和讃を

### 読んでみる その十一

因果一如(いんがいちによ)の門ひらけ  
無二無三の道直し(みちなおし)

(白隠禪師坐禪和讃より抜粋)

(意訳)

「因果一如の真理に目覚め、迷いが晴れたのなら、自分が進むべき道もしつかりと見えてくるはずです。」

因果一如(いんがいちによ)

因果は「原因」と「結果」であり、結果はすでに原因と一緒に生まれているという意味の言葉です。「頑張れば結果が出る」。「努力が足りないから結果が出ない」。このような言葉や考え方は、ある意味ではごくごく一般的なものと言えるかも知れませんが、日頃から目標とする結果を持つことは大事なことです。目標が期待に変わって余計な重圧を背負っ

てしまったり、出てしまった結果が自分の期待していたものと違う場合が多いのもまた人生だと思ふのです。

平昌オリンピックから一ヶ月が経過しようとしています。夏のオリンピックと比べてしまうと、やや地味な印象がある冬のオリンピックですが、連日、日本人選手の活躍がテレビを賑わせました。

その中でも、スピードスケートの小平奈緒選手が歴史的な金メダルを獲得したことが大きなニュースの一つとなりましたが、同時にライバルの韓国・李相花(イ・サンファ)選手との逸話が大きな反響をもたらしてくれました。

李相花選手は五〇〇メートル競技における世界記録保持者であり、小平選手が金メダルを取るためには、必ず越えなくてはならない大きな壁でもあります。一言にライバルと言っても様々な形があり、日頃から競技の世界だけで渡りあい、黙々とお互いの世界で勝負するライバルもあると思いますが、この二人は競技中

だけではなく、お互いの住まいを訪ねたり、食事を振る舞ったり、私生活においても大きな交流を持っていました。「次のオリンピックはあなたが勝って、私が二位ね。」とエールを送り合い、どちらが勝っても、お互いが心の底から満足できる素晴らしい精神関係が永年の付き合いで、築かれていたようです。

結果がすべてではない

今回の件で、白隠禪師がお伝えしたいことは、結果だけにとらわれない心だと思ひます。小平選手にしても李選手にしても、オリンピックの金メダルというのは、あくまで方便でしかなかったのではないかと思ひます。この世の一番の金メダルは、お互いに心から競技に打ち込める環境に身を置いているということであり、それを支えて下さっている方々がいることであり、切磋琢磨できるライバルが存在してくれているということであると、二人は気づいていたように見えるのです。

(宗禅寺住職 高井和正)

# 禪と共に歩んだ先人

## まつ お ば しょう 松尾芭蕉 Ⅳ

臨濟禪と接し、その精神性や美意識に感化される事により、自分自身を高め、偉大な功績を残した先人達を紹介するという趣旨で進めていこうというこの項ですが、前回に引き続き江戸時代前期に生き、日本の俳諧(俳句)を芸術的域にまで高め大成させた「俳聖」とも呼ばれる「松尾芭蕉」についてお話をさせていただきます。

### 「おくのほそ道」

旅を重ね、多くの紀行文を残した芭蕉ですが、その集大成といえるのが「おくのほそ道」です。芭蕉の残した紀行文で最も著名なものといえるこの作品ですが「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也」という序文を記憶されてる方も多いのではと思います。

現代でいう、北関東 東北、北陸方面

への旅、およそ百五十日間の記録が紀行文となつています。出立は元禄二年三月二十七日(新暦一六八九年五月十六日)江戸深川を門人の河合曾良をともとしてのものでした。この年は芭蕉の崇拜する西行法師の五百回忌にあたる年でした。西行は平安時代末期から鎌倉時代にかけて活躍した歌人で、放浪の生活を続けながら、多くのすぐれた短歌を残しました。そういった古の先人への想いが、この旅の根底にあったのかもしれない。

### 行く春や

鳥啼き魚の

目は泪

出立にあたり詠まれた句です。去りゆく春への惜別を見送りに来た人々への思いに重ね、また初めてとなるみちのく路への不安も感じさせる句となっています。

日光・松島などに寄りながら平泉(岩手)に至ります。

### 夏草や

兵どもが

夢のあと

### 五月雨の

降残してや

光堂

かつて奥州藤原氏によって栄華を極めたこの地も戦によって滅ぼされ、今は見

る影もない、その栄枯盛衰の寂寥感を詠んだ句と、悠久の年月を越えて輝き続ける中尊寺金色堂への畏敬を感じる句。平泉で詠んだこの両句には、変わりゆくも、変わらぬものの対比が描かれていて、とても興味深く感じられます。

奥羽山脈を越えて出羽(山形)に至った芭蕉は山奥にある名刹(名だかい寺。由緒ある寺。)立石寺を訪ねて、

### 閑さや

岩にしみ入る

蟬の声

という句を詠みます。岩にしみ入るほど蟬が啼いているのですから「閑かさや」とは程遠い状況なのではないでしょうか？

なにか「閑か」だったのでしょいか？この時芭蕉はその光景と一体化していたのです。「物我一致」の境涯だったので。立石寺から見渡す風景、梅雨明けの空、蟬の声もろとも一体となった芭蕉の内面は研ぎ澄まされ、明鏡止水ともいふべき心境となりました。「閑か」なのは芭蕉の内面だったのです。

以下次号 (一峰 義紹)



# 禅寺雑記帳

◆春のお彼岸となりました。この冬は日本のあちこちで観測史上最も温度が低い厳しい寒さで、羽村や青梅ではマイナス九度台の日もありました。凍結で水道管が破裂したり、水が出ない日が何日も続いたり、雪も積もったりと本当に厳しい冬でしたので、ようやくの春にほっとさせられます。

◆その寒さの中、お隣の韓国では二週間におわって平昌オリンピックの熱い戦いが繰り広げられ、日本代表選手の活躍は私たち日本人に沢山の勇気や感動を与えてくれました。メダル獲得数も冬季大会最多の十三個という素晴らしい結果でした。時差の無いこともあり生放送でテレビ観戦した方も多かったことでしょう。ニュースで結果を知るよりも、生放送で頑張っ

ハラハラドキドキ、一喜一憂するのが一発勝負のオリンピックの醍醐味だと思います。我が家でも家族で声を上げ拍手しながら応援いたしました。

◆さぞ学校でもオリンピックの話題でもちきりだろうと息子たちに聞くと、小学校でも中学校でも、意外と話題にならなかったというのです。理由がわかるかと聞くと、多分自分の部屋でゲームをするなど、テレビもニュースも見っていない子供が多いのでは、とのことでした。

◆選手の活躍を見て自分も頑張ろうと思ったり、負けてしまった選手に惻隱の情を感じたり、表彰式の日や丸や君が代に自然と愛国心を掻き立てられたりと、オリンピックからは沢山のことを学べる筈なのに、興味を持たない子供が多いのでは、この国の将来は大丈夫だろうか不安になります。二年後には東京でオリンピックです。せっかくの機会を無駄にしないよう、学校でも各家庭でも意識して子供たちが試合を観るように工夫して欲

しいものです。

◆開催国韓国と日本は、歴史的な背景から関係がギクシャクしていますが、スケートの小平奈緒選手が泣き崩れる李相花選手を励まし抱き合うシーンは今大会でのハイライトでした。試合後も記者会見でも、お互いを褒めあい健闘を称えあう様子がとても清々しく、観ていて嬉しくなりました。個人が仲良く出来るのなら、個人の集まりである国同士でも同じよう出来る筈です。羽生選手の美しい演技や、カーリング女子チームの笑顔を絶やさない姿勢も韓国で好感をもって受け容れられたと聞きます。

◆オリンピックの精神は、「スポーツを通して心身を向上させ、文化・国籍などさまざまな違いを乗り越え、友情、連帯感、フェアプレーの精神をもって、平和でよりよい世界の実現に貢献すること」とあります。まさにその通りの素晴らしい大会でした。東京オリンピックもそういう大会になりますように。(禅林恭山)